

餓えた彼女はしつこい

パスワード限定公開 35287views 136 620 7853文字

2019-05-20 20:06:08

稚作「転生王女は魔法に憧れ続けている」のアニスフィアとユフィリアの年齢指定ありな小話。

これは少し先の未来のお話。

* * *

精霊は魔力を糧とする霊的な存在である。

それは大精霊であっても括りとしては精霊なので魔力を欲する性質は変わらない。

精霊は自らの好む魔力に引き寄せられる。どの精霊が好むのか、その魔力の性質と精霊の相性がそのまま魔法の適性となる。

これが精霊の基本だ。大精霊だってこの基本的な性質から変わってない。まあ、何が言いたいかと言うと大精霊であっても好みの魔力はあるし、それを糧としたくなるという訳だ。

そして大精霊は精霊契約者、つまり人としての肉体も持っている。精霊としての欲求と人としての欲求。この2つが重なると、端的に言う執着へと変わる傾向がある。

では、精霊契約者として名を連ねる事になったユフィリアはどうなのだろうか？

その答えは、もう執心のなまでの愛情表現だった。

「ユフィ……！ もう、む、りい……！」

ベッドに押さえつけられるように体を沈ませるのはアニスフィア。その頬は朱色に染まり、目元は涙で濡れて潤んでいる。呼吸は落ち着かないのか、大きく吸い、そして吐き出す。

そんなアニスフィアを抑え付けながら見下ろすユフィリアは僅かに息を荒くするのみだ。頬に朱に染まってはいるものの、アニスフィアに比べればその色は濃くない。

精霊にとって魔力は糧であり、魔力を取り込む事は食事と言い換えても良い。その存在を保つ為に魔力を求む精霊だが、大精霊に至っては少しばかり事情が違う。糧である事は間違いないが、どちらかと言えば人間で言う所の趣向品に近い。

精霊と違って大精霊は、その大精霊を宿す精霊契約者は肌の触れ合い、つまり接触をもって魔力を取り込む事が出来る。手を繋ぐだけでも良いし、抱き合うだけでも魔力の摂取自体は可能ではある。

しかし、それは微々たるものであり……つまり、何が言いたいかと言うと。魔力を求めるならばこうした肌の触れ合い、閨事に耽るのが一番効率が良いのである。

「……まだ、足りないです」

「どれだけ食べるのさあ!? もう、クラクラするからおしま、ふむう……!? むう——っ!? む、ぐ、う……！」

抗議の声など聞こえないと言わんばかりにアニスフィアの両頬に手を添えて押さえつけ、ユフィリアは唇を深く重ねる。

奪われた唇、差し込まれた舌がアニスフィアの舌を舐り始めて一体どれだけの時間が経ったのか。それはもうアニスフィアにはわからないし、ユフィリアに至っては気にしてさえない。

酸欠と繰り返される口付けによって与えられる快感にアニスフィアの時間感覚が麻痺していく。思考も覚束なくなったアニスフィアは、ただ藻掻くようにユフィリアの腕を掴んだりする。しかし、長いこと貪られ続けたアニスフィアの抵抗はあまりにもか弱いものだった。

「んんんっ……！ んや……っ、ふう、ん……！ んんーっ！ んっ……んんんっ……！」

合間を見て息継ぎをするも、ユフィリアが解放してくれる気配は一向に見えない。息苦しさにアニスフィアは力なく背中や腕を引っ掻いたり、髪を掴んでみたりするもびくともしない。

その間にも吸い上げられるように奪われていく魔力を実感するのだ。それが快感や酸欠に並ぶ抵抗の力を奪う要因でもあった。

魔力を急激に吸われるとどうなるのか？ 簡単に説明すれば脱力してしまうのだ。それに魔力を吸われる感覚というのは奇妙だが、すっかり慣らされてしまったアニスフィアにとってははくすぐったさに近い。これが微量の摂取なら心地良さにもなるのだが、こうも貪られては溜まったものではない。

ふと、両頬を包み込むユフィリアの指がアニスフィア耳に伸びる。耳の輪郭をなぞられるように触れられたアニスフィアの背筋にぞくぞくと悪寒じみた快感が走り、体が弓なりに持ち上がる。

「ふむうー!? んんうッ、ンンー———ッ!?」

耳はやめて、と言いたくても言葉には出来ない。引き摺り出されるように持って行かれた舌を甘噛みされ、比較的弱い耳に触れられるのは耐えがたい感覚となってアニスフィアを襲う。

アニスフィアの思考は真っ白に染まって、脳の奥で星が弾け飛ぶような感覚が奔る。同時にかくんと抵抗の力が抜けてアニスフィアの体がベッドに沈む。

アニスフィアの様子に気付いたユフィリアが彼女を解放すれば、ぐったりとアニスフィアが力なく体を投げ出す。アニスフィアは震えながら息を零し、目には涙の跡浮かんで頬を汚している。

「……ひ……あ……もう……しつ、こい……んだか、らあ……！」

どんなに好き勝手に貪られても目の力だけは失わず、非難するかのようにアニスフィアはユフィリアを睨む。

弱々しくも、それでも抗議せんとするアニスフィアの表情を見てユフィリアは言い知れぬ甘い誘惑に身を震わせる。自分でもどうかと思う程に、アニスフィアを貪りたくて仕方が無い。

心臓の鼓動が大きく高鳴る。自分自身をも振り回す激情に身を委ねたくなる。それをゆっくりと息を吐き出す事で堪える。

「……アニスが美味しいからダメなんです」

「人を……なんだと、思っ……」

「愛しい人ですよ」

朱色を増しながらもアニスフィアはユフィリアを睨む。それすらも可愛いのだから、この人は自分がどれだけ迂闊なのか理解しているのだろうか、とユフィリアは思う。

こんな顔を見れるのは自分だけ、普段は明るく振る舞って皆を振り回すような人が自分の手の中で喘ぎ、溺れている。その実感が全身を震わせる程に愛おしさを感じさせるのだ。

ちょん、と指で唇に触れればアニスフィアが恨みがましく上目遣いで睨んでくる。そのまま指を口の中に押し込んでしまいたいと誘惑に駆られながら、ユフィリアは唇をなぞるだけに留める。

(……これ以上食べると怒られますよね)

アニスフィアの魔力量は多い。それでももう半分以上は貪っただろうか。流石に空にまでさせてしまうと回復に時間を要してしまうので止めておかなければならない。過去にやりすぎた結果、接触すら禁止された記憶はユフィリアにとって苦い記憶として残っている。

しかし、やはり物足りなさはある。糧を得るという意味では十分だが、アニスフィアを愛でたいという欲求は逆に膨れあがっている程なのだから。

「アニス」

ユフィリアはアニスフィアに触れるようにキスをする。同時に自分の魔力を押し流すようにアニスフィアへと送り込む。

キスをむずがるように嫌がっていたアニスフィアだが、ユフィリアの魔力を感じればおずおずと唇を重ねる。大量に失った魔力を取り戻そうとするように啄む。

濡れた唇が僅かな水音を奏でる。わざと音を立てようとするユフィリアにアニスフィアは柳眉を立てるも、魔力を取り戻すのを優先したのか文句を言う事はなかった。

「……ユフィ……もう……いい……変に、なるからあ……」

暫くユフィリアの魔力を啄んでいたアニスフィアだが、息を荒くしながら力なく首を左右に振る。

ユフィリアの魔力を受けとる事が出来るアニスフィアだが、それは魔力の交換に等しい。自分のものではない魔力を受けとる事はアニスフィアには手慣れたものだが、だからといって大量に摂取をすれば醜態してしまうのだ。

こうなってしまうえばアニスフィアの抵抗もほぼ無に等しい。くず、と小さく笑いながらユフィリアはアニスフィアの体に身を寄せる。

「夜は、まだ長いですからね」

ふっ、と耳に息を吹きかけるように囁けばアニスフィアの体が震える。身を振るアニスフィアを捕まえるように腕に抱きながら、ユフィリアは満足げに笑う。

アニスフィアの体を這い回るようにユフィリアの手が蠢く。体を重ね合ったせいで乱れた衣服を手慣れた様子でユフィリアははだけさせていく。するすると動く手が服を脱がしていくと、アニスフィアがユフィリアを睨んでいた。

「……手付きが慣れてていやらしい」

「アニスのここもいやらしいですよ」

ぴん、と立っていた乳首を掠めるように指を滑らせればアニスフィアの腰と声が跳ねた。

アニスフィアを横抱きにするように抱えながらユフィリアが両胸の乳首を交互に撫でるように触る。程よい大きさの胸は触り心地が良い。そのまま没頭するようにユフィリアは胸を撫で回していく。

「ふ……ッ……う……！ ひ、……くう……！」

「我慢しなくて良いですよ……」

「して、な……！ あっ、ッ、……つまむ、にやあ……！」

呂律が回らずに跳ねた言葉と同時にアニスフィアが身を振る。ユフィリアの手を掴んで離そうとするも、何も果たさずにユフィリアの手に添えるだけだ。

「ふふ……こっちの方がいいですもんね」

「ひっ、ツツツ……あ……！ や、めっ……！ ああ、アアアツ!？」

胸よりも反応が跳ねたのは、臍。

胸から滑るようにして臍へと降りた指がくりくり、と押し込むように臍を撫でる。するとアニスフィアが仰け反って体を震わせる。

「臍、やだ……やだあ……！ さわ、っちゃ……や……ツ、だ、からあつ！ おす、なあ……！」

「どうしてですか？」

「あひいっ!? ユフィ、の、せい、だあつ！ もう、おへそ、変になって、る……からあ……！ ぐりぐり、や、だあつ……！」

先程よりも余裕の失せたようにアニスフィアが首を左右に振る。それは胸に触れられたいた時よりも反応が顕著だった。

臍はアニスフィアにとって感じやすい性感帯として“開発”されきってしまった。それも誰のせいかなと言えば、先程から楽しそうに弄んでいるユフィリアのせいなのだが。

腹部は力の集まる部位として知られる事が多いが、魔力においても似たような事が言える。魔力を糧として好むユフィリアにとってお腹とは“吸い付き甲斐がある部位”であり、すっかりと目をづけられた為、散々いじり回されたのだ。

時には指で搔き回され、時には舌で舐られ、時には服ごして焦らされ。すっかりと覚え込まされた感覚が腹部から広がっていき、アニスフィアの目の前に星が散って弾け飛ぶ。

「あつ……、だ、めっ、離し……だ、めっ、イツ……ちゃ、イク、おへそ、で、やだやだ、イクツ……！ ウウウウツ……！ アアアアツ!!」

ユフィリアの手から逃れようと力を込めれば、指の感覚が逆に鮮明になってしまう。それでも体に力が込められるのはアニスフィアの意志ではもうどうにもならず、空気を押し出すように押し込まれたユフィリアの指で絶頂まで上り詰める。

弓反りに仰け反っていたアニスフィアの体が再びベッドに沈む頃には、ユフィリアの指は臍から抜け出て、その指をユフィリアはご機嫌な様子でぺろぺろと舐めている。

「……ばか」

アニスフィアの小さな悪態にもユフィリアはご機嫌になるばかりだった。

もう知らない、と言うようにアニスフィアは視線をユフィリアの顔から逸らす。

「もう……好きに、して……」

「……好きにされたい、が本音じゃないですか？」

耳元で囁かれたユフィリアの声に甘い痺れが走る。

横抱きに背中から抱き締められるように体勢を変えられ、そのままユフィリアの指がアニスフィアの下着をするりと脱がせていく。

抵抗するのも最早億劫だと言うように、ユフィリアの動きに合わせて下着を足から抜く。露わになった秘部は誰の目から見てもわかる程に濡れそぼっていた。

散々ユフィリアに弄ばれた体は、ユフィリアの魔力で酩酊しつつあったアニスフィアには最早毒を回されたと言っても過言ではない程に熱に浮かされていた。臍にされた愛撫でお腹の奥が切なくなる程に呻いているのを嫌でも感じる。

欲しい、と。そう思うのに言い出せないのは、やはりどんなにしっかり者でも年下であるユフィリアに言いようにされるのは癪だと、小さなプライドが邪魔をする。

そんなアニスフィアを微笑ましく思いつつ、あまり虐めると本当に泣きかねないので今日はここまでしておきましょう、とユフィリアは矛を収める。後は——ただ溺れさせて、溺れたい。そうしよう、と。

「入れますよ」

ふとももをなぞるようにして内股へと迫り、ユフィリアの指がアニスフィアへと滑り込む。潤滑液としては十分過ぎる滴りはユフィリアの指をすんなりと呑み込んでいく。

「あ、あ……！ き、た……はい、った……！」

口を半開きにしながらアニスフィアが悶える。既に目は蕩けきっていて、涎が零れて口の端を伝っている。

きゆうきゆうと狭いぐらいの中はユフィリアの指を締め付けるように震えていて、反応の良さにユフィリアの胸もきゅんきゅんと締め付けられてしまう。

もっと自分の存在を感じて、刻み込んで、忘れられなくして。そう思えば心は天にも昇る程に喜び勇んでしまう。アニスフィアを求めて止まず、ユフィリアは身を乗り出してアニスフィアに口付ける。

「ん……！ んん……！ ちゅ、ぱ……ん……ユフィ……」

ユフィリアの口付けにアニスフィアは夢中で舌を差し出す。差し出された舌を絡め取りながら、指も奥へと押し込んでいく。

根本まで入り込んだ2本指を中を広げるように開いて、交互にくねらせれば小さくない水音が響く。手がふやけてしまいそうだと思いながら、ユフィリアは指に魔力を込める。

ユフィリアの指に纏わり付いていた愛液が魔力に反応していく。ユフィリア自身の手から出てきた水と混ざり合って指を一回り、二回りと大きく伸ばしていく。

「ひいっ、あっ……！ それ、き、たあ……♡ おつきい……♡」

「奥までくすぐりますからね」

「きて！ もう、好きにしてえ！ 奥、奥触って、いいからあ！」

早く、と首を左右に振りながらアニスフィアが懇願する。水で作った指はユフィリアの意のままに新たな関節となってアニスフィアの奥へと滑り込む。

そして指が触れたのは——子宮の入り口だ。それをくすぐるように2本の水指で触れていく。

「ああ——っ!? あ、あああああっ、あっ、ひい、や、あ、あああああッ！ ユフィ、そこ、いい、そこ、もっとお！ もっと、掻き混ぜてえ!! もう、苦しい、苦しいのお！ 早く、早く楽にさせてえ!!」

ユフィリアに体を預けながらアニスフィアが体を仰け反らせる。苦悶と喜悦が入り交じった蕩けた顔で悩ましそうな艶声を上げる。

膣内をユフィリアの指と水指が這い回る。ここまで体を許せば、アニスフィアは理性まで蕩かしきって与えられる快感に素直になる。本人はここまで乱れるのが嫌だからこそ抵抗するのだが、1度なってしまうばもうなりふり構わずだ。

「すき……っ、すきい！ ユフィ、ユフィ、もういいから！ もう全部あげるからあ！ 魔力も、私も、全部、全部う！ 滅茶苦茶にしてよお、早くう!!」

ごくり、とユフィリアは思わず唾を飲んでしまった。そこまで言われると貪りたい欲求がむくむくと起き上がってくる。でも、今のアニスフィアは理性が飛んでる状態だ。正気に戻ったら機嫌を損ねるのは間違いない。

それでも、あとちょっとなら、ほんの少しなら、加減してなら。数度、言い訳を重ねたユフィは指の腹を押し当てるように奥へ、水指をくねらせ、振動を交えながらとぐろを巻いて膣内を押し広げさせる。

そしてかぶりつくようにアニスフィアの唇を奪い、魔力を吸い上げる。渴いた大地が水を吸うように満たされていく魔力がユフィリアを幸福感の沼に引き摺り込む。

「ぷはっ、アニス……アニス、アニス！」

「ユフィ、ツ……あっ♡ も、だめ、きたきた、きたあっ！ ……ツ、もう、イク……ツ……イツちゃう！ 滅茶苦茶に、されて、イツ……ちゃ……！」

焦点が合っていない瞳でアニスフィアが快感に打ち震えながら絶頂に上っていく。最早収まりきらず、だらしなく出ていた舌ごとユフィリアが口づけて食べる。

アニスフィアの嬌声はユフィリアによって貪られ、飲まれ、くぐもった声となる。

「———ツ、———ツ！ シューツ……！ シふ……♡ は……あ……♡」

アニスフィアの白目にまでなりかけていた瞳がぼんやりと降りてくる。そのまま目を閉じて、かくん、と意識が落ちる。

完全に意識が落ちてしまったアニスフィアを見て、ユフィリアはさあっ、と顔を青くさせた。粘着質な水音を立てて抜かれた指を見て、たたり、と汗を掻く。

「……やりすぎました」

怒られるの確定ですね、と。ユフィリアはアニスフィアが起きた時の反応を想像して、ぺろりと名残惜しげに指についた愛液を舐め取った。

* * *

そして、翌朝の事である。

「フカー……ツ！」

ベッドの上で、布団に丸まりながらアニスフィアがユフィリアを威嚇していた。

近づけばひっかくぞ、と言わんばかりの勢いだ。毛を逆立てた猫のような声をあげているアニスフィアを見て、レイニは呆れたように溜息を吐いた。

「……こればかりは、ユフィリア様も学習しませんね」

「うう……」

何も言い返さず、寝間着のまま膝を抱えるユフィリア。朝、目を覚ましたアニスフィアにベッドから叩き出されたユフィリアは幸せな夢から覚め、なんとかご機嫌を取ろうとあれやこれやと手を尽くしていたのだが、アニスフィアは遺憾の意を示すだけだ。

すっかりと臍を曲げてしまったアニスフィアを諷めていると、レイニが呆れた顔で入ってきた訳だ。まるでこうなる事がわかっていた、と言うように。

「だからもうちょっと小出しに貰うべきだって言ったじゃないですか」

「はい……」

「いつ忙しくなる身かもわからないんですから、毎回忙しいのを抜ける度に食られたらアニス様だって怒りますよ」

「仰る通りです……」

「素直にもうちょっと甘えて我慢してくださいね？ ユフィリア様」

(……餓えてる時の方が美味しいので我慢したくなるんです、と言ったら怒られるでしょうか？)

内心、邪な考えを浮かべているとレイニにジト目で睨まれている事に気付いてユフィリアは表情を取り繕う。

最近、何故か身近な人に感情が読まれやすくなっていると感じるユフィリアであった。周囲から見ればバレバレなのであったが。

「はあ……まったく、これじゃあ酷い事になってるんじゃないですか？ ほら、アニス様。布団離してください」

「やだ」

「やだ、じゃないですから……」

汗や体液やらで酷い事になってるだろうシーツに溜息を吐きながらレイニは回収しようとするも、アニスフィアが駄々をこねた幼子のように布団を離さない。

「あ、えっと処理はしたのでそこまで酷くはないと思うのですが……」

「……処理って、どんな風に？」

「……隅から隅まで綺麗に頂きました」

「最ッ低ッ!!」

ユフィリアの告白にアニスフィアが涙目になって叫んだ。そしてシーツに丸まったまま、部屋を飛び出していってしまう。

「ああっ！ ちょっと、アニス様！ 幾ら離宮の中だからって裸で走り回らないでくださいッ!! ……ユフィリア様は反省ッ！」

「はい……」

この日から数日、ユフィリアにアニスフィア接触禁止令が出されるのであった。

2人がちゃんと仲直りが出来たかどうかは、またそれは別のお話で。